

8/15 2010



Japan Music Education Society *News Letter*

第41号

No. 41

日本音楽教育学会ニュースレター

目 次

1 報告・お知らせ	
1-1 平成 22 年度第 2 回常任理事会報告.....	2
1-2 学会宛の「要望書」ならびに近畿地区例会報告について.....	6
1-3 編集委員会から報告.....	7
1-4 選挙管理委員会からお知らせ.....	8
2 新刊紹介	
2-1 『小学校新学習指導要領の授業 音楽科実践事例集（全学年）』	8
2-2 『ママと小さな天使へ CD シリーズ』	9
2-3 『鑑賞の授業づくりアイデア集 へ～そ～なの！音楽の仕組み』	10
3 会員の窓	
3-1 千万町小学校の子どもたちはいま（志民一成）.....	11
3-2 中堅研究者の想い ～つながりに育てられた～（高橋雅子）...	12
4 事務局より	
4-1 日本音楽教育学会第 41 回大会（埼玉大会）の参加申し込みについて.....	13
4-2 お知らせ.....	13
編集後記	

1 報告・お知らせ

1-1 平成 22 年度第 2 回常任理事会報告

日 時：平成 22 年 7 月 4 日（日）13：00～16：30

場 所：立教大学 5 号館 第 2 会議室

出席者：加藤，有本，今川，今田，小川，奥，島崎，杉江，坪能（記録）

欠席者：南

会務報告 <平成 20 年 5 月 9 日以降>

5 月 9 日 平成 22 年度第 1 回常任理事会・理事会

6 月 5 日 第 1 回選挙管理委員会（於 共立女子大学）

6 月 30 日 音楽教育学 第 40 巻第 1 号発送，ニュースレター No.40 発送

【審議事項】

1 第 41 回埼玉大会について

今田企画担当理事より大会日程および費用等の確認が行われ，すでにホームページで仮プログラムが発表されていることが報告された。研究発表が全部で 17 の分科会になって同時進行の発表が多いこと，発表者の所属の表記の統一についてなどが今後の課題として話し合われた。また，島崎会計担当理事より決算報告及び予算案を大会プログラムに掲載することが提案され，承認された。

2 会員の資格及び大会での発表資格に関する内規について

有本副会長より，正会員，学生会員，名誉会員の資格に関しての内規をつくることが提案され，その内容について継続審議することになった。加えて団体会員，賛助会員，特別会員の資格についてあらためて検討することとなった。大会での発表資格についても，一般発表，共同企画，プロジェクト研究，大会実行委員会企画，院生フォーラム等の発表資格について今後継続して検討することとなった。

3 会則等改訂について

細則中の会長被選挙権・会費納入についての明記，参事制度の導入について文案をもとに検討した。加えて，学会組織内に国際交流委員会，広報委員会，学会賞審査委員会を入れ，今後各委員会規定を整備していくことが確認された。

4 A 氏の「要望書」への学会の対応について

調査結果として 90 頁にわたる報告書が提出され，常任理事会で学会としての対応を検討した（関連記事を 6 頁～7 頁に掲載）。

5 新入会員及び退会者について

今川事務局長より報告され，承認された（一覧表として，4 頁～5 頁に掲載）。

【報告事項】

1 各委員会等報告

○編集委員会

奥理事より，『音楽教育学』40-1 号を発送したこと，『音楽教育実践ジャーナル』通巻 15 号の校正が終わったこと，また，『音楽教育学』40-2 号に 9 本の投稿があったことが報告された。なお，『音楽教育実践ジャーナル』の投稿規程に関する議論を行っていることが報告された。

○選挙管理委員会

第1回選挙管理委員会（6月5日）の内容について、永岡委員長に代わって今川事務局長より報告された（「1-4 選挙管理委員会からお知らせ」を参照）。

○国際交流委員会

ISME への参加者を増やす努力をしているので、常任理事からも院生などに宣伝をしてほしいという水戸委員長のメッセージを今川事務局長が伝えた。

○学会賞審査委員会

加藤会長より、育志賞推薦候補者を募集中であることが報告された。

○音楽文献目録委員会

今年度第2回会議（6月19日 於武蔵野音楽大学）の内容が報告された。

○倫理ワーキンググループ

加藤会長から提示（6月25日）された以下の課題検討を開始したことが報告された。

(1) 全体問題について

- ・本学会として考えるべき倫理問題を明らかにする。
- ・本学会としてこの問題に対してどこまで会員に求め、社会に表明すべきか検討する。
- ・上記の問題に取り組むため、広く学会内外から情報収集する。

(2) 第41回大会研究発表予定者への「お願い」文を検討する。

2 第4回夏期ワークショップ進捗状況について

今田企画担当理事より、寺田北海道地区理事を中心に以下の企画が準備されていることが報告された。

ワークショップ in Sapporo 2010 江差追分入門～うた・歴史・文化～
開催日時 2010年8月19日（木） 10:00～16:45
会 場 北海道教育大学札幌校

3 第42回大会について

杉江理事より、奈良教育大学にて、2011年10月22日（土）23日（日）開催の方向で準備を進めていることが報告された。

4 事務局から

8月10日～17日を閉局期間とすることが報告された。

今後の予定

7月4日	平成22年度第2回常任理事会
7月24日	平成22年度第2回編集委員会
8月19日	第5回 夏期ワークショップ 会場：北海道教育大学
8月上旬～中旬	音楽教育実践ジャーナル Vol.8.No.1 発行、 ニュースレター第41号発行、第41回大会プログラム発送
9月24日	第3回編集委員会、第3回常任理事会・第2回理事会
9月25～26日	第41回全国大会 会場：埼玉大学
12月下旬	音楽教育学 第40巻第2号発行、ニュースレター第42号発行
2月中旬	平成22年度第4回編集委員会・平成22年度第4回常任理事会
3月末日	音楽教育実践ジャーナル Vol.8.No.2 発行、ニュースレター第43号 発行、平成22年度会計決算

<平成22年度第3回常任理事会・第2回理事会の予定>

9月24日（金）時間未定、埼玉大学で開催されることになった。

お詫び

音楽教育学 第 40 巻第 1 号ならびにニュースレター第 40 号が、皆様のお手元に届くまでに大変に長い時間がかかってしまいました。事務局を代表して深くお詫び申し上げます。

学会誌とニュースレターおよび封入物のすべては、6 月 24 日に発送業者に搬入されましたが、封入と配送作業に想定を越えた時間がかかり、会員のお手元には 7 月 10 日前後になってようやく届くという事態になりました。この間、事務局から業者に対しては、再三配送状況の確認と遅配の理由説明を求めましたが、結果的に会員の皆様に大きなご迷惑をおかけしたことは大変残念で、申し訳なく思っております。とくに、『音楽教育学』の期日通りの完成に向けて大変なご努力をしてくださった編集委員の皆様、執筆者をはじめとする関係者の皆様、そしてニュースレター編集及び執筆者の皆様には、心からのお詫びを申し上げます。

事務局長 今川恭子

新入会員（平成 22 年 5 月 25 日以降）：40 名

*正会員数：1467 名

1-2 学会宛の「要望書」ならびに近畿地区例会報告について

会長 加藤富美子

平成 21 年 3 月 6 日に開催された「平成 21 年度近畿地区第 2 回地区例会」における講演とワークショップの内容に対して、「要望書」が会長、前会長、前近畿地区代表理事宛に提出されました。なお、この例会は 2 部から構成され、第 1 部は「“小学校、中学校にもっともっと三味線を！”—わらべうたを使った三味線授業—」、第 2 部は「帝塚山大学「子ども学科」の新設とその授業実践報告」でしたが、要望書は第 1 部に関して提出されたものです。

要望書を提出した A 氏（非会員）は、地区例会での B 氏（非会員）による「発表内容」及び「配布資料」は、A 氏が開発・実践した「わらべ歌から邦楽へ」という指導メソッド、および、A 氏が三味線の文化譜の書式で書いたわらべ歌の楽譜の無断使用である、すなわち「著作権侵害と同等の行為に当たる」と主張しています。その上で A 氏は、①学会として「指導メソッドと楽譜の無断使用」を認める、②例会で配布された楽譜の今後の引用に際して A 氏の Copyright を付す、③「例会報告」に①②を掲載し会員に周知徹底する、の 3 点を要望しています。常任理事会では、予備的調査委員会を設けて厳正な調査を行いました。その結果は 90 ページにのぼる報告書にまとめられ、学会はこの報告書に基づいて対応を検討いたしました。その結果、学会としての学術的かつ教育実践的な視点に基づき、以下の判断に至りました。

(1) 例会の内容について

例会の内容は、B 氏による三味線の材料や製作方法を中心とした講演、および、三味線奏者 C 氏（非会員）を講師とした三味線演奏のワークショップであり、そのいずれにおいても「要望書」の中で A 氏が開発・実践したと主張している指導メソッドへの言及はみられなかった。

(2) 「著作権侵害と同等の行為」といえる「楽譜の無断使用」があったかどうかについて

以下の理由から「楽譜の無断使用」にあたらない。

- ・ C 氏が三味線演奏のワークショップで配布した楽譜は、C 氏自身が手書きしたものを、A 氏がコンピュータで浄書したものと判断される。
- ・ 原曲であるわらべうたは『日本のわらべ歌全集』（柳原書店）収載のものと、繰り返

し以外の異同がない。

- ・三味線譜の書式は、C氏が日常的に指導に用いている文化譜の書式に基づいたものである。
- ・A氏による浄書楽譜は、市販の「三味線文化譜作成ソフト」を用いれば誰でも同様に作成することができる。

(3)「著作権侵害と同等の行為」といえる「指導メソッドの無断使用」があったかどうかについて

以下の理由から、「指導メソッドの無断使用」にあたらない。

- ・A氏が開発したと主張する「わらべ歌から邦楽へ」という指導メソッドのうち、わらべ歌で十分に遊ばせた上で体感的に覚えたわらべ歌の旋律を三味線で弾くというプロセスは、上記(1)で述べたように、例会では用いられなかった。
- ・例会のワークショップで用いられた、三味線指導の導入にわらべ歌を教材として用いるという指導方法は、箏、篠笛、三味線などの邦楽器の指導において、すでに多くの教育実践がみられる。

以上から、「要望書」に書かれた3月6日開催の近畿地区第2回地区例会の内容に関するA氏の主張を認めることは困難であると判断し、A氏の要望を受け容れることはできないとの結論に至りました。

なお、本学会が示す見解は、著作権に関する法的判断を含むものではありません。あくまでも学会としての学術的かつ教育実践的な視点に基づく見解であり、別途、司法判断が下された場合には、その判断を遵守するものです。

また、『音楽教育学』への平成21年度近畿地区第2回地区例会報告は、以上の事情に鑑み、掲載を延期いたしました。

1-3 編集委員会から報告

編集委員会委員長 村尾忠廣

今年度第2回編集委員会は7月25日に開催されており、「ニュースレター41号」の原稿締め切り日(7月20日)までに会議の内容を報告することができませんでした。そのため、以下は第1回編集委員会の後、編集委員会MLで話し合ったことを基に報告させていただきます。

1. 『音楽教育学 40-2号』について

「研究論文」としての投稿が現在8つ、「研究報告」としての投稿が1つ、研究報告としてすでに採択されているものが1つあります。『音楽教育学』への投稿論文が少ないことが一つの問題であっただけに、これは大変嬉しいことです。

2. 編集委員会の基本方針・投稿規定の改正

編集委員会の基本方針や、投稿規定の改正の問題など前委員会から引き継ぎになっている様々な問題を現在MLで議論しております。これは第2回編集委員会で議論を深め、決定できればその結果を理事会へ提案する予定です。

3. 『音楽教育学 40-1号』について

1) 発送の遅れ

『音楽教育学 40-1』は6月24日に納入されましたが、7月10日を過ぎてもまだ届かなかったところがあったように聞いております。発送業者に何らかのトラ

ブルがあったようです。

2) 近畿地区第2回例会報告の先送りについて

「地区例会報告」では近畿地区だけ掲載されておりません。これは会長からの要請を受け、編集委員会が掲載を先送りとしたためです。理由につきましては、本号ニュースレター「1-2」として、6～7頁に会長名で詳細に説明されていますので、これをご覧ください。近畿地区例会の関係者の皆様には大変申し訳ありませんが、よろしくご理解のほどお願いいたします。

4. 『音楽教育実践ジャーナル 15号』について

特集は「日本語をどうくたうか」というもので、林光・米川敏子氏の対談を初めとして、日本語の歌い方について非常に刺激的な内容がびっしりと掲載されています。同封の音楽教育実践ジャーナルをお楽しみください。

5. 投稿のお願い

『音楽教育実践ジャーナル』(Vol.8 No.2 通巻 16号)の特集テーマ、応募要領については、同封のチラシと学会HPをご覧ください。ふるって投稿して下さるようお願いいたします。また、9月の全国大会(埼玉大会)に向けて発表を準備されている方にお願ひです。ぜひ、『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』に、その発表内容を論文・報告としてまとめ、投稿していただだけませんか。口頭発表と学会誌への投稿は重複しても何ら問題ありません。発表・質疑応答を経てブラッシュ・アップされた論考をお待ちしています。こちらもおふるってご応募くださるようお願いもうしあげます。

1-4 選挙管理委員会からお知らせ

選挙管理委員会委員長 永岡 都

このたび、第20期選挙管理委員として、中嶋俊夫、鈴木慎一朗、村上康子、桐原礼、永岡都、以上5名が、加藤富美子会長より委嘱を受けました。互選により、永岡が委員長、中嶋が副委員長に選出されました。一同、大きな責任ある仕事をいただき、身の引き締まる思いであります。これから2年間、会員のみなさまのご協力をいただきながら、任務を全うしたいと考えております。

6月5日には、今川恭子事務局長に陪席いただき、第1回の選挙管理委員会を開催いたしました。会則、細則、選挙管理委員会規定、選挙実施要領にもとづいて、選挙の実施に関する様々な確認をいたしました。実際に選挙が行われるのは、ちょうど1年後の平成23年6月末の予定ですが、公正で正確な選挙事務が進められるよう、今から準備してまいります。会員のみなさまにも選挙へのご理解とご協力をお願い申し上げ、選挙管理委員会からの御挨拶とさせていただきます。

2 新刊紹介

2-1 『小学校新学習指導要領の授業 音楽科実践事例集(全学年)』

高須 一・佐藤日呂志 編著

小学校の先生方、お待たせいたしました！平成20年に公示しました新小学校学習指導要領に基づく音楽科の実践事例集です。先生方のご存じのように、小学館の教育雑

誌『教育技術』では、先生方の指導法や教材の工夫、授業を行う角度をちょっと変えただけでこんなに授業が変わるのかという紙面を、イラスト満載で1年生から6年生まで各教科ごとにアイデアを提供し、音楽科を含めた特集を組んできました。当然ながら音楽科の執筆に当たっては、経験豊富でアイデアたっぷりの先生方に執筆してきていただいています。『教育技術』の執筆陣が総力を挙げてつくったのが、この音楽科実践事例集です！この本では、前文部科学省教科調査官の高須と、千葉県主任指導主事の佐藤が、それぞれ行政の立場と現場に密着した立場とで、執筆者の方々を理論的に支えつつ実践としての一般性が伝わるように全力投球しました。特に、新学習指導要領の改訂点に視点を置き、まだ十分に理解を得られていない〔共通事項〕の取扱いや、言語活動の在り方、音楽づくりや鑑賞の指導の要点、我が国の音楽の取扱いなどを、イラストを中心に読みやすく、分かりやすくするように努めました。そのため、忙しくて本を読んでいる時間がない先生方にも、自分の受けもっている学年だけをさっと見ることができるようになっています。

小学校学習指導要領自体は法令ですからなかなか読みにくく、文科省から出されている「解説書」を読んでもなかなか理解しにくいところがあるのではないのでしょうか。それは、「指導書」を「解説書」にし、「指導資料」を発刊しなくなったことによるのかもしれない。今は、地方自治の時代ですから、国は指導（法）の在り方までは立ち入らないという基本姿勢をもっているためです。これは、今の時代の動きから考えれば当然のことでしょう。ただ、そのためには学習指導要領とその解説書をじっくり読みこんで理解しなければなりません。これはとても大切なのですが、全科担当の先生方がすべての教科についてそこまで勉強する時間があるのでしょうか。特に音楽科は、音のない書物から理解することはなかなか難しいものです。このような背景もあり、本書が誕生したわけです。ぜひ、お役立てください。

執筆者：高須 一

小学館、2010年4月刊行
全200頁、定価（1,800円＋税）
ISBN 978-4-09-105864-5



2-2 『ママと小さな天使へ CD シリーズ』

今川恭子&小畑千尋 監修・選曲・解説

お母さんが赤ちゃんに口ずさんで歌ってあげるために、音楽に合わせて親子で一緒に楽しむために作成したインストゥルメンタルのCDシリーズができました。

【森のくまさん】は、お母さんの心に残っている歌、赤ちゃんに歌ってあげたい歌など、童謡や唱歌を贅沢に集めた1枚です。ジャズピアニスト秋吉敏子さんの神秘的な《蝶々》に始まり、宮川彬良さん編曲の《シャボン玉》、平原まことさんのサクソで演奏される大人びた《さっちゃん》など、これらの曲の素晴らしさを改めて感じさせられます。実際、あらゆる年齢層の方に好評で、特に高齢者の方々からの反響の大きさに我々も驚いております。

【子象の行進】は、ジャンルも地域も異なる多彩な音楽が盛りだくさんです。《イエ

ロー・サブマリン》《ジュピター》，坂本龍一＋ダンスリー《ダンス》，藤原真理さんのチェロで《鳥の歌》があったかと思うと、チター，二胡，そして100年以上前に作られたストリートオルガンの演奏も。音楽の玉手箱のような1枚です。

【月の光】は，赤ちゃんとお母さんが心穏やかな時間を過ごせるようなあたたかい演奏を厳選しました。加藤知子さんのバイオリンによるエルガー《朝の歌》に始まり，サン＝サーンス《水族館～動物の謝肉祭～》はチェコ・フィルハーモニー管弦楽団，パッヘルベル《カノン》は井上圭子さんのオルガンなど贅沢な演奏が，心地よく続きます。そして最後は，武満徹《小さな空》がまるで映画のエンディングロールのように奏でられます。

CDには全曲の解説を載せましたが，歴史的な説明はできるだけ少なくし，「こんな風に聴いてもらいたい」「こんな風に赤ちゃんとお母さんと楽しんでほしい」という制作者の願いを書きました。「赤ちゃんにこの音楽がいいですなんて音楽は，究極のところあるわけない」・・・そう思われたみなさま，ぜひお聞きになってください。保育現場，保育者養成においてもご活用いただきたいCDです。



発売元：コロムビアミュージックエンタテインメント
発売：2010年1月
価格：各¥2,100(税込)

執筆者：小畑千尋

CDのジャケットは，左から順に【森のくまさん～素敵なメロディ】【子象の行進～地球のハーモニー】【月の光～やすらぎの音色】です。

2-3 『鑑賞の授業づくりアイデア集 ヘ～そ～なの！音楽の仕組み』



坪能克裕・坪能由紀子・高須一・熊木眞見子・
中島寿・高倉弘光・駒久美子・味府美香 著

「ヘ～そ～なの！！」という子どもの声が聞こえてきそうな本書は，2007年1月より始まった『教育音楽小学版』での連載をベースに書籍化したものである。作曲家，小学校の音楽教員，音楽教育研究者が，一年以上をかけて共にアイデアを練り，議論し，実践を重ねながらつくりあげた一冊である。全40の指導事例が掲載され，それぞれの活動で取り扱われる主鑑賞曲だけで55曲，主鑑賞以外を含めるとさらに多くの楽曲が，西洋音楽からポップスまで時代も様式も多岐にわたって取り上げられている。

第1章 問いと答え，第2章 反復と変化，第3章「音楽の縦と横の関係」から聴きなおよすは，2008年告示の新学習指導要領に示された「音楽の仕組み」をもとにしている。鑑賞曲からある「音楽の仕組み」を取り出し，それにもとづいた音楽活動を体

験する。この体験を通じて、後で実際に音楽を聴いたときに、子どもたちは「へ～そ～なの！！」とガッテンしつつその「音楽の仕組み」を理解するのである。それに対して、第4章 ぐっとくる意外な聴き方 では、学習指導要領から少しはなれ、坪能克裕が作曲家ならではの新しい音楽の聴き方を提示する。「休符も音楽」（第4章）などのアイディアをもとに、教師たちが斬新な授業を展開させていく。最初の休符がいかに大切かを、子どもたちは替え歌で歌ってみることによって気づき、最後にはベートーヴェンの『運命』の冒頭を聴いて「休符ってやっぱり大切！」と納得するのである。

本書には要所要所に、実践でそのまま使える作曲家のワンポイント・アドヴァイスや、楽曲解説が取り入れられ、授業づくりに役立つ情報満載である。小学校の教員に限らず、中学校や高校の教員、公共施設などの教育プログラムに携わる人や、その他、もっと音楽の聴き方を広げたい人にとっても必携の書であろう。

執筆者：味府美香・駒久美子

音楽之友社、2009年11月発行

全143頁、定価（2,400円+税）ISBN：978-4-276-32142-7

3 会員の窓

3-1 千万町小学校の子どもたちはいま

静岡大学 志民 一成

愛知県岡崎市立千万町（ぜまんじょう）小学校は、旧額田町にあたる山間にあった、小規模のへき地校だが、『音楽教育実践ジャーナル vol.3 no.2』に掲載された新山王政和氏による報告をご覧になった方も多いことだろう。またNHK総合の「につぼん紀行」という番組でも、「巣立ち支えるメロディー～愛知・岡崎市 5人だけの小学校～」として紹介された（2010年3月24日放送）。「あった」と表現したのは他でもない。千万町小は、今年3月末をもって閉校となったからである。本来、新山王氏からその後の経緯について、ご報告いただくのが筋かとは思いますが、千万町小でマリンバの指導をされていた小田もゆる氏が、筆者の高校の同級生であり、現在も親しくさせて頂いているので、また少し違った角度からご紹介できればと思う。

千万町小の全校音楽は、40年以上の歴史があり、数々の賞を受賞してきた。音楽への高い集中力から生み出される緻密なアンサンブルと、豊かな音のニュアンスは、聴く人をぐいぐいと引き込む力を持っている。筆者は、小田氏による指導があった2009年8月と、それから、ほぼ1ヶ月後のコンサートの日の2度、千万町小を訪れた。2回の訪問で印象に残ったのは、5人（6年生2人、4年生1人、1年生2人）の子どもたち一人ひとりが、責任をもって自分の音楽をしようとしていたことである。人の演奏を聴いて合わせるということの前に、膝を使ってリズムを取り、まず自分の中でテンポを刻むということを徹底していた。小田氏は「私の役目は音楽にこだわって子どもに接することだと思っている」という。そんな彼女の「こだわり」が感じられる指導だった。そのような、いわば「自立して音楽をする」ためには、自身の中で音楽が鳴っていなければならない。しかも、自分のパートの音だけを鳴らしているのではなく、他者との関係をも含んだ音楽の全体像が頭、いや身体の中で鳴り響いている必

要がある。おそらく、そういった音楽における自立は、学校そして地域での人との密度の濃い関わりの中で自分の役割や存在意義を自覚することと、インタラクティブに作用し合っているのではないかと感じた。音楽と生活が、結果として相互に良い影響を与え合っているのかもしれない。

昨年、それまで連続して出場してきたコンクールが、予算削減で予選会が録音審査となった。録音の日、子どもたちがなかなか集中できず、先生方で相談した結果、演奏用の制服を着て録音に臨んだというエピソードを、後日耳にした。人に聴いてもらうことが、確かに子どもたちの音楽への原動力となっている。平岩前校長先生から頂戴したメールに、次のようなお言葉があった。「子どもたちも、そして周りの大人も、子どもたちや学校のこと、地域のことを思っていてくれる存在があるということが、大きな心の支えになっていく」。人に見守られているという意識が子どもたちも、そして、それを支える人々の自覚も刺激しているように思った。新山王氏は「これらの活動を支えてきたのは『地域が持つ教育力』であり、地域住民が絶えず学校へ目を向け、子どもたちの活動に関心を持ち、学校教育活動への理解と協力があつたからであろう」と述べている。周囲の人たちに見られ、そして見守られることで育まれる自覚と成長は、教えること以上に大きな意味を持つと、あらためて感じた。

統合後の5月、統合した宮崎小学校で引き続き校長をされている平岩先生より、近況報告のメールを頂いた。「いつもスポットライトが当たっているわけではないので、自分の出し方や居場所などなど、気をつかって過ごしていると思います」。あの明るく人なつっこい1年生2人のことが、少々気にかかるこの頃だが、遠くから見守り続けることにしたいと思う。

3-2 中堅研究者の想い ～つながりに育てられた～

山口大学 高橋 雅子

学会員のみなさん、こんにちは！

合唱指揮者をめざしていた時期もあつたので教育者としては少々の自負はもっているものの、研究者として「中堅」という自覚（自信？）がなかったためか、執筆依頼のタイトルに愕然…。しかし、そうは言っても学会に入会して20数年経つ。学会に入会したいきさつや、これまでの自分と学会との関わりを振り返る良い機会としたい。

みなさんが、音楽教育研究の道に入ったきっかけ、動機は何だろうか？私のきっかけは、ずばり「偶然」である。音楽教育研究云々を知る以前に、学会に入会してしまったのだから。したがって私にとって音楽教育研究は、関わっていくうちに「必然」となったと言えるだろう。

懐の深さと寛容さを備えた学会

「偶然」は忘れもしない、1988年の夏休み、東京学芸大学で開催された「第3回音楽教育東京ゼミナール」である。私が卒業した学部は音楽系ではなかったので、卒業後音楽の免許取得を目的に短大音楽科に入り直し、当時中学校教諭2年目だった。初任者研修試行の研修第1期生だったため、1年目は夏休みの洋上研修や各種研修会、研究授業や報告書作成に追われた。2年目は余裕ができたので、合唱講習会や合唱セミナー合宿を中心に意気込んで夏休みの計画を立てた。その空白日に何か音楽関係の勉強ができる講習会等がないか探していたら、「偶然」日本音楽教育学会の「東京ゼミナール」を見つけたのである。

もちろんそのときの私は、日本音楽教育学会がどういう目的の学会でどのような人の集まりであるか知らなかったし、音楽教育の研究について深く考えたこともなかったのだが…。当日は飛び込み参加、思ったよりこじんまりした温かな会で好印象、何より発表内容はまったく理解できなかったことを覚えている。知識・技能の向上をめざした楽しい音楽授業を行うための理論や経験値から導かれた方法論、すなわち学校現場ですぐに役立つものが音楽教育研究くらいに思い込んでいた私は、深くて広い世界を目の当たりにして衝撃を受けた。

その後の打ち上げパーティ、2次会、3次会まで出席し（これは私にとっては「必然」）、すっかり大学の先生方とも仲良くなり、学会入会を勧められた。そして、現職教員であっても進学して音楽教育を学ぶ機会があることを教えてもらい、結果的に中学校教諭を3年で辞めて大学院へ進学したのである。

入会当時を振り返ると、ゼミナールということもあったのだろう、出席していた会員の方々がお互いほとんど顔見知りで（おかげで新参加者の私は声をかけてもらった）、和気あいあいと音楽教育や研究について未来図を語り合っていたように思う。少なくとも傍から見ていた私には、なんだかわくわくするような、そしてとても魅力的な世界であるように映ったことは間違いない。

合唱と学会と ～人との「つながり」の原点～

「必然」は、大学や大学院、学会を通しての人との「つながり」のおかげである。人との「つながり」によって、今の私は育てられたと思っている。もちろん、小学校以来の合唱活動、合唱指導を通して得たものが人との「つながり」を考え行動するときの基盤になっていることは確かだ。それは人間関係がわずらわしさを含むものでありながら、しかし私は「人間が好き」であること。さらに「人との適度な距離感」。合唱活動において「組織として合唱団を成熟させること」と「共属感情をさらに一体感へと高揚させる演奏」という正反対の類型の両立を目指していくうちに、無意識に人との距離感を考える習慣が身に付いたのかもしれない。なぜなら、より良い活動をめざす上で共同体の機能やバランスを熟考することは、詰まるところ人との距離感に帰結するからである。

私が学会で築いた人との「つながり」は、継続して自分の研究分野の分科会に参加することによるものだ。近年の動向を知る手がかりとなり、同じ分野の研究をする人的ネットワークの広がり期待できるだろう。私は、なるべく学会で発表することを自分に課している。残念ながら、近年、合唱や声楽に関する研究発表が減り、ひとつの分科会をなし得なくなってきた。これまで私は自分の勉強のために研究発表をしてきたが、今後は合唱や声楽を研究する人が集う場をつくる意味でも、「合唱」がテーマに含まれる研究発表を提供していくことが役目のひとつであると考えている。

4 事務局より

4-1 日本音楽教育学会第41回大会（埼玉大会）の参加申し込みについて

1. 同封のハガキ「日本音楽教育学会 第41回大会出欠回答」に必要事項をご記入の上、8月31日（火）必着でご投函ください。なお、総会に欠席される方は必ず委任状に必要事項をご記入ください。
2. 同封の郵便振替「払込取扱票」に必要事項をご記入の上、9月15日（水）までにお振り込みください。振り込みによる大会参加費は以下の通りです。大会当日に現金で支払われる場合は（ ）内の金額となります。

正会員参加費 : 4,000 円 (当日払いの場合: 4500 円)
学生会員 (学部生に限る) : 3,000 円 (当日払いの場合: 3500 円)
懇親会費 : 4,000 円 (一律)

*期日を過ぎてお振り込みされますと、当日受付で振込の確認ができない場合がございます。9 月 15 日の振込期日をお守りくださるようお願い致します。

*会員以外の方 (臨時会員) は当日受付にて参加申し込みをお願い致します。

臨時会員参加費 : 2,500 円 (1 日参加) 4,500 円 (両日参加)

◎大会の最新情報は大会専用ホームページに掲載しております。

☞ <http://www.music.edu.saitama-u.ac.jp/jmes41th>

4-2 お知らせ

1. 年会費未納の方には「払込取扱票」を同封致しました。なるべく早くお振り込みください。
2. 諸変更届はお早めに学会事務局に FAX または E-mail でお知らせください。
3. 8 月中は、事務局開局時間が一部変わります。下記をご確認ください。

事務局開局時間

月・水・金 10:00~16:00

ただし、8 月 10 日~8 月 17 日は閉局期間となります。

この間のご用件は E-mail にてお願い致します。

☞ onkyoiku@remus.dti.ne.jp



..... 【編集後記】

ちょっと早めのニュースレター 41 号をお届けします。新設のコーナーを二つ設けました。

【会員の窓】は、皆様が日頃考えていること、こうしたらどうだろう、困ったなあ、発見しました!...などのさまざまな情報を交換するためのコーナーです。気軽なつぶやきから、タイムリーなもの、役立つもの、じっくり熟成させたい話題まで、どしどしお寄せください。

【新刊紹介】では、解説書、CD、教則本など皆様の出版物をご紹介したいと考えております。出版不況の昨今、良質な音楽教育情報を発信したい、発行部数でなく中身で勝負したいという会員の皆様、自薦・他薦を問いません。情報をお待ちしております。

坪能由紀子・小川容子 記

.....

<平成 22~23 年度 日本音楽教育学会役員>

会 長: 加藤富美子

副 会 長: 有本真紀

常任理事: 今川恭子 (事務局長), 坪能由紀子・小川容子 (総務), 杉江淑子・

島崎篤子 (会計), 今田匡彦・南 曜子 (企画), 奥 忍 (編集)

理 事: 寺田貴雄 (北海道), 筒石賢昭・阪井恵・西島 央・山本幸正 (関東)

後藤 丹 (北陸), 新山王政和 (東海), 田中多佳子 (近畿),

三村真弓 (中国・四国), 木村次宏・菅 裕 (九州)

会計監事: 田中健次・本多佐保美

事 務 局: 亀山さやか・山本由紀子・徳山菜央・中村幸子

<日本音楽教育学会事務局>

【事務局本部】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

日本音楽教育学会事務局

TEL&FAX 042-381-3562

E-mail onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

開局日：月・水・金 10:00～16:00